

学教育研連から、小学校低学年の理科の存続と中・高における理科教育に関する配慮が提言され、第4部はそれを支持しました。

(6) IGBP について、International Geosphere and Bio-

sphere Program には多くの研連が関係しているので、学術会議として連絡組織を設置するよう提案しました。

(早川幸男)

書評

星の誕生

磯部 秀三著

(共立出版、昭和60年10月25日発行、153頁、定価1,300円)

すさまじかったハレーブームも、ハレー彗星と共に去り、世の中も少しは静かになったようである。ハレー彗星を観測するために買われた天体望遠鏡は、今度は、多くの美しい天体の観望のために使われるだろう。このように、(にわか?)天文ブームのおかげで、いったい野辺山の観測所では、どんなことをしているのか、という質問を度々受ける。その度に、電波望遠鏡を使って、星の誕生の様子や、遠い銀河のことを調べています、と答えることにしている。「電波」という言葉は、テレビ・ラジオなどの通信用に使われていることもあって、割にすんなり受け入れてくれるのだが、「星の誕生」という言葉は、そうでもないらしい。考えてみれば、ある日、突然、空のある場所でキラキラ輝き出すのが何度も見えるわけでもなく、それによって星座の形などが変化するわけでもない、「星が生まれる」と言われてもピンと来ないのも無理もない。

この本は、最近の研究によって、次々に明らかになってきた、星の誕生にまつわる多くの問題を取り上げ、詳しく解説している。昔の人々は、夜空に輝く星の中で、毎日位置を変える惑星や太陽、月以外の星は、位置も変えず、人類の誕生のはるか昔から、はるか未来まで明るさも変えない存在であると考え、恒星と呼んだ。しかし、天文学の発達に伴い、必ずしもそうではないこと、さらに、理論・赤外線天文学・電波天文学の発達により、星もガスが集まって生まれ、進化し、やがて死んでゆくという事実が明らかになってきたことを、歴史的背景をもふまえて、解説している。星の誕生を研究する中で、いったいどんな問題があるのか、また、その問題が、いかに解決されてきたのか、あるいは、どこまで分っているのか、非常に細い点にまで気を配って書かれている本である、と言えよう。

しかしながら、使用している図表や数式の中には、やや専門的知識を必要とするものがあり、それに対する説明が不足ではないかと感じられる。これでは、この本の

属するシリーズの特色としている、「高校生から一般社会人までたやすく読破できる」ことは、少々むずかしいのではないと思う。内容が高度であることは、よいことではあるが、読者が理解できるように、充分な説明をしなければ、この本の目的は達せられないのではないだろうか。また、星の誕生の研究に関しての最近の日本の赤外線天文学、電波天文学の成果についての記述があまりないのは、全くの片手落ちである。さらに、本文や図表中に見られたいくつかの誤った記述は、読者の混乱のもととなる恐れがある。改訂版での訂正を望む。

(大石雅寿)

☆ ☆

☆ ☆ ☆



写真は杉並区立科学教育センター

★営業 ASISD 品目★
天体望遠鏡と双眼鏡
ドームの設計と施工

▶主なドーム納入先▶

東京大学宇宙航空研究所/東京大学教養学部/東京学芸大学/埼玉大学/福島大学/川崎市青少年科学館/杉並区立科学教育センター/駿台学園高校(北軽井沢)/船橋市立高校/高知学園/土佐市民館/刈谷市中央児童館等の他、日本全国に100余基の実績。

ASTRO 光学工業株式会社

東京都豊島区池袋本町2-38-15 ☎03(985)1321